

# クリスチャン・ツィメルマン

# チョン・ミョンフン

## 東京フィルハーモニー交響楽団

11月20日(木) 19:00 サントリーホール

11月23日(日) 18:00 サントリーホール

ルトスワフスキ:ピアノ協奏曲〈両日〉

(ツィメルマンに捧ぐ)

メシアン:ほほえみ〈両日〉

チャイコフスキー:交響曲第6番「悲愴」〈20日〉

ベートーヴェン:交響曲第5番「運命」〈23日〉

S¥17,000 A¥14,000 B¥11,000 C¥8,000 D¥5,000

ジャパン・アーツ夢倶楽部会員料金

S¥16,000 A¥13,000 B¥10,000 C¥7,200 D¥4,500



クリスチャン・ツィメルマン

Krystian Zimerman



チョン・ミョンフン

Myung-Whun Chung

## 約束のコンチェルト

### ルトスワフスキと交響曲の名作の2夜

#### —ツィメルマンとミョンフンへの期待!

音楽評論家/ピアニスト: 下田幸二

「あなたのためのピアノ協奏曲が出来上がりました」

1988年、クリスチャン・ツィメルマンは驚きの電話を受けた。相手は母国の偉大なる作曲家ヴィトルド・ルトスワフスキである。1975年に弱冠18歳にしてショパン国際ピアノ・コンクールで優勝し、演奏家としてのスタートを切ったツィメルマン。思えば、その彼に、ポーランドの音楽界をリードし続けてきた巨匠ルトスワフスキが親切に接してくれ、「あなたに弾いてもらうピアノ協奏曲を作曲したい」と言ってくれたのは、1977年のこと。10年以上の歳月を経てそれが実現したというのである。

ルトスワフスキのピアノ協奏曲が初演されたのは、1988年8月19日、ザルツブルク音楽祭であった。作曲者自身の指揮、オーストリア放送交響楽団、そして、もちろん独奏ピアノはツィメルマンである。「初演からもう20年たったなんて、驚きです。その間に何回くらい演奏したでしょうか…。おそらく30～40回くらいでしょうが、その半分くらいは、ルトスワフスキ氏自身の指揮です。…私は彼と

の最後のエピソードが忘れられません。チューリッヒで彼の協奏曲を演奏した時のことです。たいへん残念ながら、彼はそのコンサートの日前に亡くなってしまっていました。ところが、ほかの指揮者との共演を終えて自宅に戻ると、なんと彼から手紙が届いているではありませんか。そこには、『今回のコンサートで私が指揮できなくて申し訳ない』としたためであったのです…。ルトスワフスキ氏のそういった誠実さが、私がこの協奏曲を演奏するときに、多大に影響しているのです。」

この夏、懐かしそうに語るツィメルマン氏が東京にいた。

ルトスワフスキは、しばしば《現代の古典作家》と呼ばれている。現代的な響きの中にも《枠》、《構成》、《秩序》がある。このピアノ協奏曲も、現代的な響きながら、4つの楽章の明確な《枠》があり、《構成》と《秩序》をもって見事なクライマックスを形作る。「ルトスワフスキ氏は、普通の音楽家としての願いを持っていました。ルトスワフスキは、彼の音楽を現代音楽という〈ゲッター〉に入れて欲しくなかったのです。例えば、《ルトスワフスキのタベ》などどくってしまったら、ルトスワフスキに興味のある人しか来てもらえないでしょう? それは残念なことなのです。」

ツィメルマンは、ルトスワフスキと「この作品を世界中で演奏し

ます。」と約束したそうである。ツィメルマンにとって、今回日本で《ピアノ協奏曲》というジャンル自体を演奏することが、実に23年ぶり。ルトスワフスキの協奏曲の初演から20年というツィメルマンにとって節目の年に、日本での23年ぶりの協奏曲がルトスワフスキで実現する。なんとと喜ばしいことか!

喜ばしいのはそれだけではない。今や世界的な指揮者として引張りだこのチョン・ミョンフンとの初共演が実現するのである。「ミョンフン氏との共演は初めてですが、彼の芸術性は、彼がモスクワのチャイコフスキー国際コンクールにピアニストとして入賞した時代からよく知っておりました。また、彼の姉であるヴァイオリニストのチョン・キョンファさんとは共演しています。私は彼との共演を心から楽しみにしています。」

さらに、楽しみなのは、ルトスワフスキのピアノ協奏曲だけではない。非常に情熱的な音楽性ながら、緻密な楽譜の読みと構成力でオーケストラを引き締め、作品の真の姿を聴衆に再現してみせるミョンフンが、後半でチャイコフスキー《悲愴》(20日)、ベートーヴェン《運命》(23日)という、交響曲の名作中の名作のタクトをとるのである。ルトスワフスキの興奮の後に、ミョンフンがこれらの名作をどのように指揮してみせるのか。2夜への興味は尽きない!